

政宗が夢、叶えたり!

400年の時を超えてスペインと日本、

ニューヨークの夢をつないだ

ニューヨークを中心に活動する日系混声合唱団「JCH」が、4月28日から5月6日にかけて「俳句と合唱でつなぐ日西文化交流プロジェクト」のためスペインを訪れた。合唱団は、南部アンダルシア州のリア・デル・リオ市文化センターとセビリア市にある世界遺産アルカサル宮殿で行われた合同演奏会に出演し、また、現地の俳句愛好家たちとの交流会も開催し日西の文化交流を図った。

リア・デル・リオ市は、約400年前に仙台藩

主・伊達政宗が支倉常長を大使として派遣した慶長遣欧使節の末裔がハボン性を名乗り現在でも約800人が住んでいる日本と非常にゆかりがある町。東日本大震災の後に同市が被災地を支援する俳句を贈ったことをきっかけに再び日本と交流が深まり今回のプロジェクトにまで発展した。

壮大な歴史ロマンを背景にしたこの一大イベントを企画し、成功まで導いたJCH指揮者兼NPO「風の環コンサート」代表である白田正樹さんが本紙にレポートを寄稿した。



世界遺産アルカサル宮殿の中庭でのコンサート(写真提供) 映画監督 我謝京子

コンサートを 終えた夜に

「白田さん、昨夜は政宗がちゃんと見ていましたよ!三日目が夜空にすっかり輝いていました!」

3年に及ぶプロジェクトである世界遺産アルカサル宮殿での合唱コンサートが大成功に終わった翌日、その俳句コーナーに出演していただいた俳句愛好家さんからそう告げられた時、私はまた新たな感動を覚えた。前日からの疲れや寝不足もいつべんに吹き飛んだ気分になりました。でも願わくばセビリアの夜空を照らしていたというその下弦月を生で見たかった!下弦月をつけた兜は私が最も敬愛する戦国武将であり私の出身地である仙台を築いた郷土の英雄、伊達政宗のトレードマークなのです。でもコンサートのプロデュース音楽監督、指揮、ステージマネージ、音響、照明そして出演者の出入りの誘導に至るまで一人何役もこなさざるを得なかった私には知る由もありません。リハールから本番終了、そしてホームステイ先のハボンさん宅のベッドに入るまで、空を見上げることなど一度もなかったのです。

「政宗よ、お前の想いと夢は確かに叶えたよ。悪いけど代わりにすくく、いい思い」をさせてもらった。

スペインはアンダルシア州の州都セビリアを象徴するアルカサル宮殿、そしてハボンさんの街コリア・デル・リオ市での「俳句と合唱でつなぐ日西文化交流プロジェクト」が終わった時、私はこんな思いが胸がいっぱいでした。「いい思い」とは単に2度のコンサートがうまくいったとか、俳句の交流会が成功だったというレベルの話ではありません。400年、そしてスペインと日本(そして私たちの場合はニューヨーク)という時空をいっぺんに飛び越えて「同じ血が流れているかもしれない」友と真に心を通わせることができたという一種の満足感・達成感です。それは「愛」とか「友情」とか「絆」というような一言ではとても表現できない「熱い思い」と言ってもいいでしょう。あえて政宗の好きな言葉に例えるなら「仁」と「信」にあふれる心というべきでしょうか。

400年越しの 夢のために企画

伊達政宗の命を受けて支倉常長ら180余人の使節を乗せた「伊達の黒船」が現在、石巻市渡波地区にある月の浦から出帆したのが1613年10月。その1年後にスペインのコリア市に一行はたどり着きました。その時10余人がその地に留まったとされており、彼らの末裔とも言われている「ハボン」姓を名乗る人たちが、現在も800人以上コリア市周辺に暮らしているのです。

宮城県は1992年にコリア市に支倉常長像を寄贈していますが、ハボンさんたちは大震災の直後に市を流れるグアダルキビル川の畔に立てられたその支倉像の前で追悼会を開き、遠い故郷を想う俳句を詠んだと



セビリア市庁舎での歓迎式典に出席したJCH一行。中央は400年記念事業実行委員長ベベ・ハボン氏。撮影: 富田賢吾

ハボンさんたちの 心を捉えた 仙台七夕

「血」が騒いだのです。「血」さん、すくく美しい話です。一緒にできるだけ多くの人にこのロマンを伝えたい。私が「俳句と合唱でつなぐ日西文化交流プロジェクト」のはじまりでした。

まず、支倉らが石巻を出帆して400年目にあたる昨年コリア市からハボンさんなどの代表と地元合唱団を仙台と石巻に招いて俳句の交流会と合唱コンサートをしました(St. Peter's)。そして支倉らがコリア市にたどり着いて400年目にあたる今年、石巻の俳句愛好家と仙台合唱団、そして私が指導しているNYの邦人合唱団がスペインを訪れ、支倉らが熱狂的な歓迎を受け約1か月滞在したとされるセビリアのアルカサル宮殿およびハボンさんの街コリア市で俳句の交流会と合唱コンサートを開く

スペインでの 心温まる歓迎

「あら、きれい。まるで仙台にいるようね」これがコリア市民図書館の一室に入った時の黛さんの第一声でした。コリア市に着いた夕方、コリア市長

感動の コンサート終了と 政宗への想い

そして庄巻は世界遺産アルカサル宮殿の中庭でのコンサート。14世紀にカステイロ・ヤ王国を統一したド

主権の歓迎式典に出席するために、この部屋に入った我々は天井に飾られた36個のミニ七夕に目を奪われ、吹き流しがエアコンから流れる風に揺られてなんとも言われぬ風情を醸し出していったのです。

それから6日間のイベントでは、この歓迎だけでなく2日間わたる俳句交流会、絵画展(昨年日本に来たコリア合唱団メンバーの一人が石巻と仙台で目にした風景をもとに描いた何枚もの風景画を展示することになった)、とそのレセプションなど、この会場づくりになりました。その度にミニ七夕での飾りつけのお蔭で仙台にいるような優しい気分を味わうことができました。まさに心憎い演出効果だったといえるでしょう。たくさんミニ七夕を作って送ってくれた仙台のボランティアの皆さんに感謝です。



地元の俳句愛好家たちと交流をした黛まどかさん。撮影: 富田賢吾



桜の植樹をする白田氏(右)とコリア市のモデスト・ゴンザレス市長。撮影: 富田賢吾

白田正樹 NPO風の環コンサート 合唱団 Japan Choral Harmony「JCH」代表 2014年5月23日

このこと。幻想的なライトのなかで夜9時から始まったコンサートには関係者だけでなく地元の方々の参加が来てくださりました。スペイン、日本、そしてニューヨークの合唱団のメンバーと会場の幻想的な雰囲気、皆さん酔いしれているように見えました。

そして空には政宗の三日月兎にそっくりの下弦月が私たちを包み込むように照らしていたというわけです。和歌、俳句、漢詩だけでなく茶道、香道、鼓などで卓越した才能を持っていたとされる政宗、時の権力者である秀吉、家康をも唸らせていたといえます。

自分の代わりに400年後に夢を実現させてくれた私たちのイベントを、彼は隻眼をかつと見開いて食い入るように見つめてくれたのでした。

きっと政宗は私にこう語りかけていたのだと思います。「お主もようやるよ。う。できたら僕も交えてほしいか」